近代文研究資料

明泉会編

昭和四十七年四月一日　印刷
昭和四十七年四月十日　発行

〔近代文研究資料〕　頒価　八五〇円

国文明泉会代表
編集者　古　関　吉　雄
発行者　長　谷　川　日　露　支
印刷者　小　河　原　龍　二

東京都江東区古石場一の九の三
発行所　新　弘　堂
電　話（六四一）九五八六番
四三八〇番

○乱丁・落丁・汚損の節は御取換え致します。

近代文研究資料

新弘堂

はしがき

本書は、大学の一般教養科目における文章表現並に近代日本文学の教授資料として、過去の経験をかえりみながら、明大和泉校舎文学研究室において、協力編集したものであります。

今日の文章といっても、そのほんとうの理解には、少なくとも明治の時代までさかのぼって、史的考察をなすことが必要であります。それで本書の第一部は明治・大正・昭和にわたる三代の名作を選定して、これを年代順に並べました。特にこれらの作品は部分の抜粋ではなく、全文を採録してありますので、文学として鑑賞し研究する上でも大いに役立つであろうと思います。

用字法に関しては、高等学校の教材までは、現代かなづかい・当用漢字に準拠しておりますが、大学の教程に入り、今後それぞれの学術研究に進んで行こうとする者にとっては、右の程度に止まってはいられません。研究資料の中には旧かなづかい・当用漢字以外の漢字、さては旧形漢字によるものが多いのであります。そこで、本書の第一部の本文では、史的変遷の考慮とともに、こうした点を考え、文章・文字はなるべく原典のままにしました。

しかし、現代かなづかいや当用漢字による文章表現が現代の社会生活上に必要であることは無論で、これによる表現能力を大学生として身につけて行くということも重要であります。それで、本書の第二部は、そうした表記法による文章を、なるべく作文力を強化したいとねがいながら、常用文例として各方面を考慮して掲げ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ました。なお、この目的遂行を一層確かにしようと思い、当用漢字その他の付編を加えました。

いうまでもなく、大学における学習は、教室における講義を中心として、その前後に各一時間ずつ合計二時間を、図書館・自習室などを利用して学習研究するというのが、その特色であります。学生諸君は、本書の講読を手がかりとして、広く深く諸文献を渉猟研鑽し、文章の理解力、表現力を高めるとともに、文学の鑑賞を通じて人格の向上に努められるよう祈ってやみません。

昭和四十七年三月

古関吉雄　八角　真
松山亮次郎　河村清一郎
西垣　脩　宮城達郎
大島田人　今泉準一
大岡　信

目次

第一部　近代文の変遷

あひびき……二葉亭四迷…（九）
うたかたの記……森鷗外…（二四）
忘れえぬ人々……国木田独歩…（四七）
一夜……夏目漱石…（六三）
一兵卒……田山花袋…（七三）
刺青……谷崎潤一郎…（九三）
奉教人の死……芥川龍之介…（一〇三）
雨にうたるるカテドラル……高村光太郎…（一一七）
春は馬車に乗つて……横光利一…（一三七）

第二部　今日の文章

故人の原稿に心痛む
――「近代文学名作展」を見て――……石川達三…（一四八）

限りなきこの活力……（一五〇）
「ことばの乱れ」について……（一五三）
天声人語……（一五七）
筆洗……（一五九）
横光利一への弔辞……川端康成…（一六一）
付編……（一六五）
五十音順当用漢字音訓ならびに字体表
同音の漢字による書きかえ
「現代かなづかい」早わかり
くり返し符号（おどり字）の用い方
ローマ字のつづり方
「公用文作成の要領」から
書簡の常識
年表

第一部　近代文の変遷

あひゞき

二葉亭四迷

このあひゞきは先年佛蘭西で死去した、露國では有名な小說家、ツルゲーネフといふ人の端物の作です。今度德富先生の御依賴で譯して見ました。私の譯文は我ながら不思議とソノ何んだが、是れでも原文は極めて面白いです。

秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有ツた。今朝から小雨が降りそゝぎ、その晴れ間にはおり〳〵生ま煖かな日かげも射して、まことに氣まぐれな空ら合ひ。あわ〳〵しい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたやうな雲間から澄みて怜悧し氣に見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戰いだが、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し聲でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶさうなお饒舌りでもなかツたが、只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の聲で有つた。そよ吹く風は忍ぶやうに木末を傳ツた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のやうすが間斷なく移り變ツた。或はそこに在りとある物總て一時に微笑したやうに、隈なくあかみわたツて、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思ひがけずも白絹めく、やさしい光澤を帶び、地上に散り布いた、細かな、落ち葉は俄かに日に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしツたやうな「パアポロトニク」（蕨の類ゐ）のみごとな莖、加之も熟え過ぎた葡萄めく色を帶びたのが、際限もなくもつれつからみつして、目前に透かして見られた。

或はまた四邊一面俄かに薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積ツた儘でまだ日の眼に逢はぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む——と小雨が忍びやかに、怪し氣に、私語するやうにパラ〳〵と降ツて通ツた。樺の木の葉は著しく光澤は褪めてゐても流石に尚ほ青かツた、が只そちこちに立つ稚木のみは總て赤くも黄ろくも色づいて、をりをり日の光りが今ま雨に濡れた計りの細枝の繁味を漏れて滑りながらに脱けて來るのをあびては、キラ〳〵ときらめいてゐた。鳥は一ト聲も音を聞かせず、皆何處にか隱れて竊まりかへツてゐたが、只折節に人をさみした白頭翁の聲のみが、故鈴でも鳴らす如くに、響きわたツた。この樺の林へ來るまへに、自分は獵犬を曳いて、さる高く茂ツた白楊の林を過ぎたがこの樹は——白楊は——全體虫がすかぬ。幹といへば、蒼味がゝツた連翹色で、葉といへば、鼠みとも附かず綠りとも附かず、下手な鉄物細工を見るやうで、而も長一杯に頸を引き伸して、大團扇のやうに空中に立ちはだかツて——どうも虫が好かぬ。長たらしい莖へ無器用にヒツ付けたやうな薄きたない圓葉をうるさく振り立てゝ——どうも虫が好かぬ。この樹の見て快よい時と云ツては、只背びくな灌木の中央に一段高く聳えて、入り日をまともに受け、根本より木末に至るまでむらなく樺色に染まり乍ら、風に戰いでゐる夏の夕暮か、——さなくば空名殘りなく晴れ渡ツて風のすさまじく吹く日、あをそらを影にして立ちながら、ザワ〳〵ざわつき、風に吹きなやまされる木の葉の今にも梢をもぎ離れて遠く吹き飛ばされさうに見える時かで。兎に角自分は此樹を好まぬので、ソコデその白楊の林には憩はず、わざ〳〵この樺の林にまで辿り着いて、地上わづか離れて下枝の生へた、雨凌ぎになりさうな木立を見立てゝ、さて其の下に栖を構へ、四邊の風景を眺めながら、唯遊獵者のみが覺えの有るといふ、例の穩かな、罪のない夢

を結んだ。

何ン時ばかり眠ツてゐたか、ハツキリしないが、兎に角暫らくして眼を覺まして見ると、林の中は日の光りが到らぬ隈もなく、うれしさうに騒ぐ木の葉を漏れて、はなやかに晴れた蒼空がまるで火花でも散らしたやうに、鮮かに見渡された。雲は狂ひ廻はる風に吹き拂はれて形を潜め、空には纖雲一ツだも留めず、大氣中に含まれた一種清涼の氣は人の氣を爽かにして、穏かな晴夜の來る前觸れをするかと思はれた。自分は將に起ち上りてまたさらに運だめし（但し銃猟の事で）をしやうとして、フト端然と坐してゐる人の姿を認めた。眸子を定めて能く見れば、それは農夫の娘らしい少女であツた。廿歩ばかりあなたに、物思はし氣に頭を垂れ、力なさゝうに兩の手を膝に落して、端然と坐してゐた。旁々の手を見れば、半はむき出しで、その上に載せた草花の束ねが呼吸をするたびに縞のペチコートの上をしづかにころがツてゐた。清らかな白の表衣をしとやかに着做して、咽喉元と手頸のあたりでボタンをかけ、大粒な黄ろい飾り玉を二列に分ツて襟から胸へ垂らしてゐた。この少女なか〳〵の美人で、象牙をも欺むく色白の額際で巾の狹い緋の抹額を締めてゐたが、その下から美しい鶉色で、加之も白く光る濃い頭髪を叮嚀に梳したのがこぼれ出て、二ツの半圓を描いて、左右に別れてゐた。顔の他の部分は日に燒けてはゐたが、薄皮だけに却て見所が有つた。眼ざしは分らなかツた、——始終下目のみ使つてゐたからで、シカシその代り秀でた細眉と長ひ睫毛とは明かに見られた。睫毛はうるんでゐて、旁々の頰にも亦蒼ざめた唇へかけて、涙の傳つた痕が夕日にはえて、アリ〳〵と見えた。總じて首付が愛らしく、鼻がすこし大く圓すぎたが、それすら左のみ眼障りにはならなかツた程で。取分け自分の氣に入ツたはその面ざし、まことに柔和でしとやかで、取繕ろツた氣色は微塵もなく、さも憂はしさうで、そしてまた愛度氣なく途方に暮れた趣きも有ツた。たれをか待合はせてゐるのと見えて、何か幽かに物音がしたかと思ふと、少女はあわてゝ頭を擡げて、振り反つて見

て、その大方の涼しい眼、牝鹿のものゝやうにをど〳〵したのをば、薄暗い木蔭でひからせた。クワツと見ひらいた眼を物音のした方へ向けて、シケ〴〵視詰めたまゝ、暫らく聞きすましていたが、軈て溜息を吐いて、靜に此方を振り向いて、前よりは一際低く屈みながら、また徐ろに花を擇り分け初めた。擦りあかめたまぶちに、嚴しく拘攣する唇、またしても濃い睫毛の下よりこぼれ出る涙の雫は流れよどみて日にきらめいた。かうして暫く時刻を移していたが、その間少女は、かわいさうに、みじろぎをもせず、唯折々手で涙を拭ひ乍ら、聞き澄ましてのみいた、只管聞き澄ましてのみいた……フとまたガサ〳〵と物音がした、——少女はブル〳〵と震へた。物音は罷まぬのみか、次第に高まツて、近づいて、遂に思ひ切ツた闊歩の音になると——少女は起き直ツた。何となく心おくれのした氣色。ヒタと視詰めた眼ざしにをど〳〵した所も有ツた、心の焦られて堪へかねた氣味も見えた。しげみを漏れて男の姿がチラリ。少女はそなたを注視して、俄にハツと顏を赧らめて、我も仕合とおもひ顏にニツコリ笑ツて、起ち上らうとして、フトまた萎れて、蒼ざめて、どきまぎして、——先の男が傍に來て立ち留ってから、漸くおづ〳〵頭を擡げて、念ずるやうに其の顏を視詰めた。

自分は尙ほ物蔭に潛みながら、怪しと思ふ心にほだされて、その男の顏をツク〴〵眺めたが、あからさまにいへば、余り氣には入らなかつた。

是れはどう見ても弱冠の素封家の、あまやかされすぎた、給事らしい男で有つた。衣服を見れば故らに風流をめかしてゐるうちにも、また何處となく止度氣ないのを飾る氣味も有ツて、主人の着故るしめく、茶の短い外套をはをり、はし〴〵を連翹色に染めた、薔薇色の頸卷をまいて、金モールの抹額を付けた黑帽を眉深にかぶツてゐた。白襯衣の角のない襟は用捨もなく押し付けるやうに耳朶を撑へて、また兩頰を擦り、糊で固めた腕飾りは全く手頸をかくして、赤い先の曲ツた指、Turquoise 寶石の一種 製の Myosotis 艸の名 を飾りに付けた金銀の指環を

幾個ともなくはめてゐた指にまで至ツた。世には一種の面貌が有る、自分の觀察した所では、常に男子の氣にもとる代り、不幸にも女子の氣に適ふ面貌が有るが、此男のかほつきは全くその一ツで、桃色で、清らかで、そして極めて傲慢さうで。己があらけない貌だちに故意と人を輕ろしめ世に倦みはてた色を裝はふとして居たものと見えて、絶えず只さへ少ひさな、薄白く、鼠ばみた眼を細めたり、眉をしわめたり、口角を引き下げたり、强て欠伸をしたり、さも氣のなさゝうな、やりばなしな風を裝ふて、或は勇ましく捲き上ツたもみあげを撫でゝ見たり、または厚い上唇の上の黄ばみた髭を引張て見たりして——ヤどうも見て居られぬ程に樣子を賣る男で有ツた。待合せてゐた例の少女の姿を見た時から、モウ樣子を賣り出して、ノソリ〳〵と大股にあるいて傍へ寄りて、立ち止ツて、肩をゆすツて、兩手を外套のかくしへ押し入れて、氣の無さゝうな眼を走らしてヂロリと少女の顏を見流して、そして下に居た。

「待ツたか？」ト初めて口をきいた、尙ほ何處をか眺めた儘で、欠伸をしながら、足を搖かしながら「ウー？」

少女は急に返答をしえなかツた。

「どんなに待ツたでせう」ト遂にかすかにいツた。

「フム」ト云ツて、先の男は帽子を脱した。さも勿體らしく殆ど眉際よりはへだした濃い縮れ髮を撫でゝ、鷹揚に四邊を四顧して、さてまたソツと帽子をかぶツて、大切な頭をかくして仕舞た。「あぶなく忘れる所よ。それに此の雨だもの！」トまた欠伸。「用は多し、さう〳〵は仕切れるもんぢやない、その癖動ともすれば小言だ。トキニ出立は明日になツた……」

「あした！」ト少女はビツクリして男の顏を視詰た。

「あした……オイ〳〵賴むぜ」ト男は忌々しさうに口早に云ツた、少女のブル〳〵と震へて差うつむいたのを見

て。「頼むぜ「アクーリナ」泣かれちやアあやまる。おれはそれが大嫌ひだ」。ト低い鼻に皺を寄せて、「泣くならおれはすぐ歸らう……何だ馬鹿氣た——泣く！」

「アラ泣はしませんよ」、トあわてゝ「アクーリナ」は云ツた、せぐり來る涙を漸くの事で呑み込みながら。暫らくして、「それぢや明日お立ちなさるの。いつまた逢はれるだらうネー」

「逢はれるよ、心配せんでも。左やう、來年——でなければさらいねんだ。旦那は彼得堡で役にでも就きたいやうすだ」、トすこし鼻聲で氣のなさゝうに云ツて「ガ事に寄ると外國へ往くかも知れん」。

「若しさうでもなツたらモウわたしの事なんざア忘れてお仕舞ひなさるだらうネー」、ト云ツたが、如何にも心細さうで有ツた。

「何故？　大丈夫！　忘れはしない、ガ「アクーリナ」ちツと是れからは氣を附けるがいゝぜ、わるあがきもいゝ加減にして、をやぢの云ふ事もちツとは聽くがいゝ。おれは大丈夫だ、忘れる氣遣ひはない、——それはなア……イ」、ト平氣で伸をしながら、また欠伸をした。

「ほんとに、「ヴヰクトル、アレクサンドルイチ」、忘れちやアいやですよ」。ト少女は祈るが如くに云ツた、「こんなにお前さんの事を思ふのも、慾德づくぢやないから……おとつさんのいふこと聽けとおいひなさるけれど……わたしにはそんな事ア出來ないワ……」

「何故？」ト仰ふ向けざまにねころぶ拍子に、兩手を頭に敷きながら、宛も胸から押し出したやうな聲で尋ねた。

「なぜといツてお前さん——アノ始末だものヲ……」

少女は口をつぐんだ。「ヴヰクトル」は袂時計の鎖をいらひだした。

「ヲイ、「アクーリナ」、おまへだツて馬鹿ぢや有るまい」トまた話し出した、「そんなくだらん事をいふのは置いて貰はふぜ。おれはお前の爲を思ツていふのだ、わかツたか？　勿論お前は馬鹿ぢやない、やツぱりお袋の性を受けてると見えて、それこそ徹頭徹尾いまのソノ農婦といふでもないが、シカシ兎も角も教育はないの――そんなら人のいふことならハイと云ツて聞てるがいゝぢやないか？」

「だツてこわいやうだもの」。

「ツ、こわい。何もこわいことはちツともないぢやないか？　何だそれは」、「アクーリナ」の傍へすりよツて

「花か？」

「花ですよ」ト云ツたが、如何にも哀れそうで有ツた「この清涼茶は今あたしが摘んで來たの」トすこし氣の乘ツたやうす「これを牛の子にたべさせると藥になるツて。ホラ Bur-mari-gole――そばツかすの藥。チョイと御覽なさいよ、うつくしいぢや有りませんか、あたし產れてからまだこんなうつくしい花ア見たことないのよ。ホラ myosotis、ホラ菫……ア、これはネ、お前さんにあげやうと思ツて摘んで來たのですよ」、ト云ひながら、黃ろな野艸の花の下にあツた、青々とした Blue-bottle の、細い草で束ねたのを取り出して「入りませんか？」

「ヴヰクトル」はしぶ〳〵手を出して、花束を取ツて、氣の無さゝうに匂ひを嗅いで、そして勿體を付けて物思はしさうに空を視あげながら、その花束を指頭でまわしはじめた。「アクーリナ」は「ヴヰクトル」の顏をジツと視詰めた……その愁然とした眼付のうちになさけを含め、やさしい誠心を込め、吾佛とあふぎ敬ふ氣ざしを現はしてゐた。男の氣をかねてゐれば、敢て泣顏は見せなかつたが、その代り名殘り惜しさうに只管その顏をのみ眺めてゐた。それに「ヴヰクトル」といへば史丹の如くに臥そべツて、グツと大負けに負けて、人柄を崩して、いやながら暫く「アクーリナ」の本尊になつて、その禮拜祈念を受けつかはしてをつた。その顏を、あから顏を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com